
古老の語る尾張町今昔 その参

街に明かりを灯す加賀提燈の伝統



目 次

はじめに	1
いきなり職人にさせられて	2
店先の仕事場から町並の風情を感じ	4
子供ごころに残る尾張町界隈のこと	7
芝居小屋と浅野川慕情	9
失った親父さんの背中から出発して	12
傘を“乾かす”苦勞と紙合羽屋さん	13
金沢流の“袖卯辰”と先祖のことなど	15
お陰さまでのこころもちが提燈作りに道を開いて	18
加賀提燈の火を灯しつつ	20
新しい世代の中での伝統技能の発展を願いつつ	22
あとがき	26

はじめに

例えば、浮世絵や千代紙絵などを見ると、私達は時代を越えて何か不思議な感銘を受けます。それは、日本のこころを育んだ江戸文化の醸造が、背景にあったからでしょうか。

ともあれ、理屈をつけるよりも、未だに色褪せることのない色彩に目を向けてみましょう。鮮やかな紅[べに]色、朱色、藍[あい]色、ベンガラ色、あるいは江戸の新橋芸者が好んだといわれる新橘色.....。

刷り職人さんに聞くと、版木の色を刷り込む時のコツは、和紙の表側に単に顔料を塗るだけでなく、和紙の中にまで顔料を浸透させることとか。とって、裏側にまで顔料が出ては、元も子もない。微妙なカン処が要求される訳です。これはもう、長年の技術的な感性がなければ出来ることではありません。

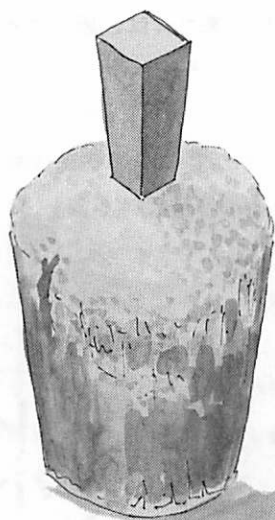
そういえば、浮世絵や千代紙絵を見直すと、片面だけしか絵がないのに気が付きます。無駄とみるかどうかは別の機会に譲るとして、だからこそ簡単に色落ちしないのだと納得させられます。

これは、体裁良く紙の表面に印刷することで、両面印刷が可能な近代的印刷技術とは、一線を画するものです。ひとつには、“こだわり”と言えるものでしょう。

この言葉が、すらすらと表面的に過ぎ去ることだけでなく、ひっかかったり、つかえたりすること。気にしなくても良いようなことをところに掛けたり、わずかのことに価値を見い出そうとすること。

だと、型通りに解釈すると、妙にギクシャクした感じになり勝ちです。けれど、もう一皮剥いてみると、日常の物事の底に連綿と流れる真実に、徹底して執着するほどに関係することのようです。はた目には、滑稽[こっけい]ごとの如く映り、時流に乗らない“古くささ”さえ見せるかも知れません。

けれど、日常性の中から、時にはそうした声を聞いて見ることは、忘れかかっている何かを思い起こさせるかも知れません。今回の、古老が語る職人根性からも。



恰好良い夢や希望をいってばかりで進まないことより、出来ることから始めることが肝心なんやね。儂でも出来ることは何か！を探すことから始めて、後は休むことのない積み重ねしかない。まあ、塵も積もれば山となるっちゅうさかい。

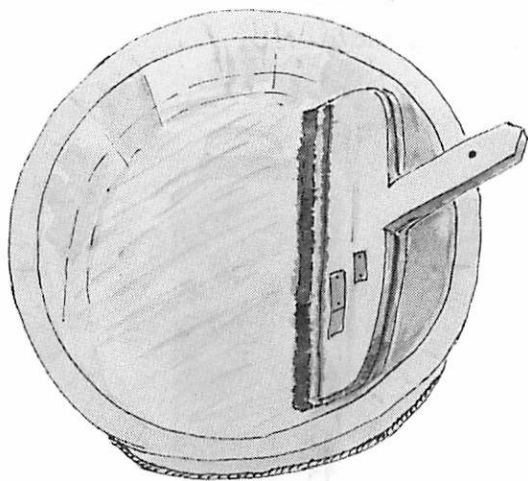
店先の仕事場から町並の風情を感じ

市姫通りが開通したんは、明治37年のことやった。道巾が五間やったそうやけど、あの当時としては広く感じられたことやろうね。何より、道一本のことで、武蔵ヶ辻からの人の流れが大きく変わってしもうた。確か近江町市場が、官許金沢青草辻市場として許可されたのも、あの年やった。今でも武蔵ヶ辻の白い木柱に書かれてあるし。

それまでは、武蔵ヶ辻から尾張町へ行こうとすると、堤町から十間町を迂回

して博労町を通って行くか、袋町を迂回して博労町に出るかしかなかったんや。お陰で、この通りは嫌でも人通りが多く、尾張町の賑わいのお裾分けに預らせてもろうていたし。

こんなに尾張町界限へ人が集まるのも、“おやま”（一向一揆衆が百年に渡って自治をしていた砦の尊称）以来、ここが加賀のお殿様のお城となったり、旧陸軍第九師団司令部が置かれたりと、いつも北陸の中心となってたさかいや。儂らの親の親戚なんか、金沢へ行くなんて言わんで、“おやま”へ行くとしか聞いたことがなかったほどや。



自然に仕事をする手にも張りが出て来るもんや。特に仕事場が通りに面しているだけに尚更や。親父さんと儂が、一番奥に並んで座り、職人さんが5人程手前に座ってせっせとそれぞれの仕事をする。そうして気の散らんように、通りに対しては後ろ向きになるのや。けど、不思議に人通りの気配は見る以上に

感じられるさかい、見られていると感じることが励みになって、ともすれば挫けそうになる気持ちを奮い立たせてくれたわ。

何しろ、ここでは一番新しい下仕事の職人よりも、儂の方が満足に仕事が出来んのやさかい。たまさかに親同志が近所で知り合いだったもんで、いきなりこんな頑固な(大変な)場所に座ることになったのやから、とんでもない。

まして、この前までは戦争で男手が取られてしもうていたし。どこの家でも女手だけで、男のするようなことでも何んでもせんとラチがあかんようになってたさかい。生活のために女の人は、どうしても遅ましゅうなるわいね。そやさかい、下手すれば、女房よりも仕事の雰囲気は知らんかったのや。

救いは、仕事の内容は違っているけども、同じ商売屋を家業としていることが、素直に物事を学ぼうとする姿勢を養っていたんかね。職人さんたちの無言の視線も、充分すぎるほどの励みになったし。



最後は、職人さんが提燈の和紙をきちんと貼り上げたものに、どういう風にヒダを付けるか。絵付けの配置と色柄を親父さんと二人で仕上げの工夫するのが、また一仕事。奇妙なことに、男の人は馬の絵を好むし、女の人は牡丹[ぼたん]の花を好むし。勇ましい男に対して、「立てば緋約[しゃくやく]、座れば牡丹、歩く姿は百合[ゆり]の花」なんて女は例えられるためなのかね。お客さんの提燈に対する希望も入れて、ここが思案のしどころ。

子供ごころに残る尾張町界隈のこと

儂が生まれる2年前には、もう金沢駅から尾張町を經由して電車が走ってしまっていた。お陰で、小さい子供のころは、大通りに出て、電車の線路の上に金属のボタンや金釘なんかを置いて、いろんな遊び道具を作るのが楽しかったわ。

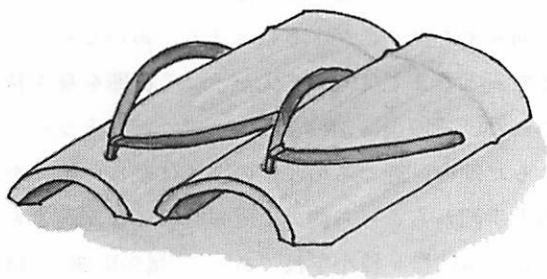
ボタンは、潰れるといろんな変わった形になるので、宝物として集めたし。金釘を電車に轢かせると、平べったい槍の先になるもんで、それを手裏剣にして投げあったり。今の大人から見れば、危ない！といって、すぐ取り上げられたやろうけど。何んでもダメ、ダメというより、あのころは自分で多少とも痛い目に合うことで、どこまでなら大丈夫かという範囲を身を持って経験させられただけ幸せやった。その辺、加減を知らず、ただもうファミコンの画面の中の敵をやっつけるだけの、近ごろの子供の姿には寂しい思いをさせられる。

友達もお城の大手門からこっち側の上尾張町の子なんかとも、良く遊んだね。道路を挟んで、こちらは松ヶ枝小学校、あっち(尾張町側)は材木町小学校と味噌蔵町小学校やったけど、学校割りする前に近所の顔見知りやったもん。特に、材木町小学校は男子校で味噌蔵町小学校は女子校だっただけに、女の子もいる松ヶ枝小学校に興味を持たれとったんかね。

あの街は今でこそ尾張町の名前で一緒になっとるけど、昔は上と下に分かれとったんや。氏神様も違うとって、下尾張町は久保市神社やし、上尾張町は安江八幡神社になっとる。そやさかい、お祭りも別々。昔の江戸時代の一方向一揆衆への対策のなごりで、浄土真宗系のお寺を浅野川と犀川の間に集めて監視し

て、人を集まらせないためにお祭りの日までバラバラにしたことが、今まで続いているとか。同じことは殿町、今町、新町にもいえとった。でも、子供にとっては、お祭りが始終あって楽しかったけど。

いつも、遊ぶことと、仲間がたくさんいて、どこでもが遊び場やった。道路は勿論、舗装なんかしてなかったもんでデコボコで、雪が降ると真っ白の平らな道になって、却って遊び易くなったわ。大手門の前の坂で、竹スキーで滑り降りたり。また、道がキンカナマナマ(カチカチに凍ってアイスパーンのような状態)になると、太い竹を縦に割ったものに鼻緒を付けた「竹ぼっぽ」を履いて滑り回ったり。ともかく、車の台数が少なかったから、大通りで何んでも出来たんやろね。今の車の混雑ぶりからは考えられんことや。



上尾張町の第二菊水劇場はそれこそもう、子供ごろにも一番面白い処やった。小学校へ行くころ(昭和10年頃)までは、まだ無声映画で、弁士がいたし

ね。入り口に大人、軍人、工員、小人の料金が書いてあって、今の銭湯のように男と女が別々に入るようになってたのや。

イタズラ盛りの子供のことで、大人が入るときに背を屈めて、ずっと入るんや。自分ではタダで入ったと自慢しているけど、どこそこの誰やと覚えられとって、後でちゃんと親が金を払うとったようやけど。

それでも、「チャンチャンバラバラ、チャンバラバラ～」なんてチャンバラ映画独特のテンポの速い勇ましい曲を、弁士についた楽隊が鳴らすと、もう居ても立ってもいられんようになる。後で怒られるのを覚悟で、またそと……。勿論、男の方の入り口から。

真っ暗な中は、木の長椅子が並んどって、男と女の席が分かれてんのやけど、真ん中だけは夫婦で座っても良いのになってたね。小学校から男と女の間は厳しく躰けられていたさかい、人前で男と女が一緒にいるのを見ると、何やらイケナイことをしてるようで体が熱くなるようやった。

芝居小屋と浅野川慕情

子供ごころは人の集まる処に引き寄せられるというんか、どうしても目は尾張町通りから浅野川へ向き勝ちやった。枯れ木橋の方まで行くと、竹本一九座長の一九席、その向かい裏の下新町には第四福助座が。浅野川緑の並木町には尾山倶楽部という具合に芝居小屋が集まっていて、賑やかな太鼓の音が響いていたね。

親に無理にせがんで、第四福助座で“児雷也[じらいや]”の芝居を見せてもらい、ドロドロと煙の中から現れ、蝦蟇[がま]の妖術を使って黒姫山を中心に神出鬼没の活躍をする姿に目を見張ったり。

そうそう、確か後になってから、蝦蟇の妖術の児雷也と、蛞蝓[なめくじ]仙人の呪術を使う網手姫と、大蛇[だいじゃ]と人間の間に生まれた幻術使い大蛇丸[おろちまる]の、それぞれが秘術を使いながらも三すくみになる忍者映画を尾上松之助やったかがしていたね。身近にいえば、兼六園の日本武尊[やまとたけるのみこと]の銅像の台座になっている石の中に、蝦蟇と蛞蝓と大蛇の形を

したものが出て、お互いに睨み合っているから、台座の石がしっかりしていると聞いたこともあるし。

また、初めて、梅の橋の前の尾山倶楽部の棧敷席に座ったものの、芝居よりも、向こう岸の東茶屋街の華やかな芸妓さんたちの色香にタジタジとさせられたり。

あの橋は、明治43年の6月に付近の人たちがお金を出し合って架けたものとか。巷には、ある旦那さんが東茶屋街へ通うのに都合の良いようにするために、陰でほとんどのお金を出したとかいう、艶っぽい噂も聞いたけど。そんな人力車がやっと通れるかどうかの橋の上を歩く姿を見るのは、何かしら風情のあるような気がしたもんやった。

芸妓さんが芝居小屋に来る時には、決まって旦那さんが一緒にいて、よく気を付けて見ていると、隣の料理屋さんからの特別の通路をそっと入って来るんや。ちょっぴり羨ましいような……。自分には、まず縁がないと思うから、憧れだけが今まで残っとんたんやろ。

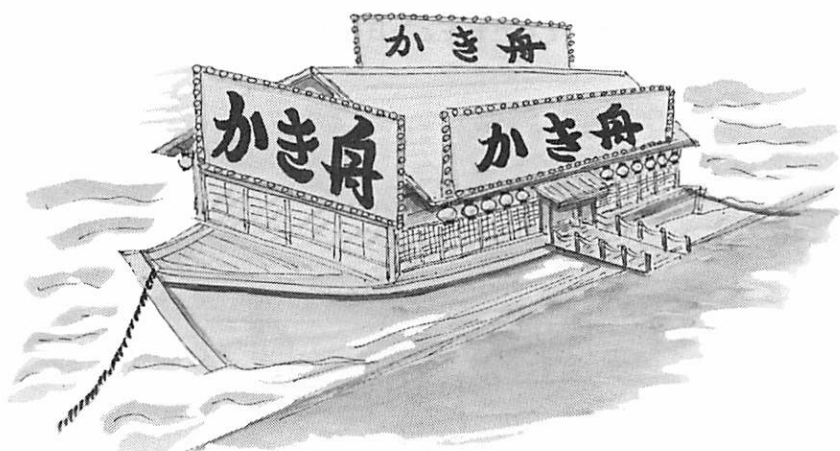
子供ごころに縁のない話はさておき、実際に職人仕事をしていると、とてもとても遊びに行くなんて気持になれなかった。罰が当たると思うとったくらいや。根詰めて仕事をする時に、フラフラとした気持で、ところが迷ったままだと、一つも良い仕事にならん。近間にある主計町[かずえまち]の茶屋街ですら、行かんと言ったら嘘になるけど……。

ただ、楽しいことを楽しいままに、悲しいことを悲しいままに、純な気持でここを開くことは大切なことやさかい、機会ある毎にいろんな処へ顔を出すことは、小さい頃も今も変わらん。

臥竜山[がりゅうざん]こと卯辰山の袂を流れる女川のように静かな浅野川は、本当に母の懐のようにいつも暖かく包み込んでくれるようやった。もっとも、一旦怒り出せば凄まじい荒々しさを見せたけれども。近くでは、第1回の百万石祭りの年(昭和27年)の7月1日の氷室饅頭を食べる日の洪水は忘れられるものではなかったし。

イタズラ盛りの子供には、それよりも川の幸の豊富さの方が大事やった。岸

から太いロープで縛って動かないようにしてある“かき舟”がいつも尾山倶楽部の近くに浮いていて、夜は宴会なんかに使われとったようや。無邪気なもんで、あの舟の中ではいつでも柿を食べさせるなんて思っていたけど、“かき”は“かき”でも、牡蛎[かき]貝やった。そして朝になると、舟から昨晚の残飯を捨てるので、自然と魚が集まっている。

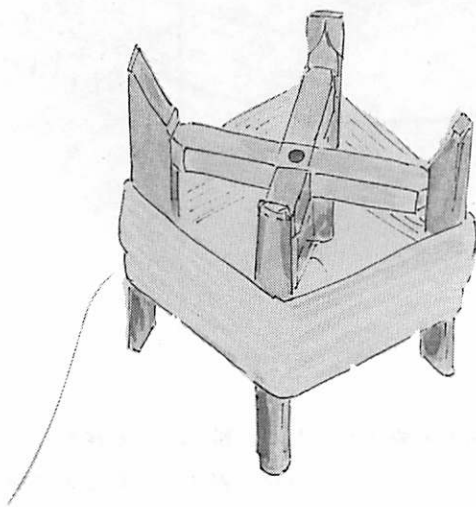


これがもう、こたえられん魅力やったね。鮎[ごり]も採れたし、その他いろんな魚や何かがついて、一日がアッという間に過ぎて。釣るのに飽きると、今度は石をソッと裏返してみたり、ふんどし一つで川の中で遊んでいると、いつの間にか暗くなっていることもしょっちゅうや。蒸し暑い夏になると、夕方から大人たちが涼みに来るので、怒られないために段々と梅の橋から天神橋、さらに上流の方へと行って、つつい帰りが遅くなって叱られたこともあった。

失った親父さんの背中から出発して

気が張っているというても、まだ親父さんのいる内は気楽やったんやね。考えてみれば、1年も一緒に仕事をしていたやろうか。何か随分と長く一緒に並んで座ってようやったけど、案外に短かったみたいで。

決して、これで良いと言われたことはなかったし、怒られることだけは目一杯に、お釣りをどんだけもろうてもいい程に、いつも何か注意され続け通しやった。親父さんとの付き合いが短かった割に、いつまでもしっかりとところにのこっているのは、このたっぷりとした叱咤激励のせいや。そういえば、口先はどんなに厳しくても、手を挙げて打たれたことはなかったさかい。



見込みがあったからこそ、いろいろ言われたんや。駄目やと感じていたら、あきらめて何も言われなかったやろうし。「職人に、これで終わりと落ち着く

処はない、一生かかっても修業の終わることはない！」と、厳しく教えられたことは、妙に暖かくこころの場所を占めているし。

隣の尾張町では、尾張町振興会が出来た年(昭和22年)の大晦日の前日、親父さんとの別れの日やった。男は黒紋付き、女は黒の着物を着て、写真と花輪を持ってしずしずと尾張町の大通りを通った時は、本当の親を失った時のような悲しみを覚えたのには、びっくりした。いつか、情がしっかりと通っていたんやね。

仕事場は、急に隣の座布団が空っぽになってしもうて、物寂しさとこころ細さに包まれるようやった。そんな気持と裏腹に、現実は一つも待ってくれず、何もかも全部、自分でせならんようになってしもうた。仕事はまだ覚えたなんてものじゃなく、どうしたら良いか分からん。

職人はおる、家族はおる。口を空けて待っている皆んなを安心させるには、自信がなくてもあるような顔をしてみせないかんし。取り繕うている内に、本物になってない技術を磨きに磨いて、何んとかしようと懸命やった。男の甲斐性、正念場というたら恰好良すぎるかも知れん。けど、実家に帰るなんて、とんでもない。

まず親父さんの身振り手振りを思い出しながら真似をして、もう一度何を言っていたか、自分のこころの底まで探し回ったね。こんなことなら、もっと良く聞いておくんだって後悔しても何にもならん。大事な今は今やった、その内なんてのは何の足しにもならんことやった。

どうにか、五十嵐の四代目を背負えるようになったのは、後がない、切羽詰まった真剣勝負の気魄があったからかも知れん。また、そうした気持を支えてくれる女房なりの苦勞が、功を奏したのだと思う。気恥ずかしくて、「すまんなあ」の一言も口にだせんかったけど、こころの中では手を合わせて拝むのが精一杯。男の不便さを感じながら、何か温かいものが胸のあたりに.....。

傘を“乾かす”苦勞と紙合羽屋さん

働いている者にとっては、何んというても朝起きが大切。人様と同じように

起きとったんでは、人より良い仕事が出来るもんでない。明るくなるかならんに起きて、早めに物事を始めることがこころのユトリにもなるし。

いつもは4時か、遅くても5時には目を覚ましてたね。住み込みの職人が二階で寝ている内に、下仕事の準備をする。そうこうする間に、女房は朝の掃除と食事の用意をしているし。通いの職人がゆっくりと出て来るころは、もう何もかも用意万端、整ってしまっているっちゅう寸法や。

同じ物を作ることでは、和傘の方が多かったわ。寸法もそんなに種類があるわけでもなし、出来合いをたくさん作って店に並べておくと、いつの間にか売れている。注文は、尾張町を始めとした大店から屋号の入ったものなんかが、結構あったね。



和傘の基本は、和紙に荏油[えのあぶら]や麻実油[あさみゆ]を塗って水を弾くようにするんや。乾きを良くするのに、桐油を若干混ぜるのがコツといえな

いこともない。問題はそれからや。乾かすのに、店の中では狭すぎるので、小さいところに遊んだ浅野川の河原へ干しに行かならん。

ところが、河原へ行く時間が遅れると、同じように桐油を塗った油紙を干しに来る紙合羽屋さんに場所を取られてしまうんや。尾張町の紙合羽屋の姑さんなんか、評判の働き者で、さっさと合羽を干されてしまう手際には舌を巻いてしまう。お陰で親しくはなったけど。ただでさえ雨の多い金沢で、和傘を干すのには本当に苦勞させられた。だからこそ、和傘が作っても作っても売れたんやけど。最後は、二階の軒下に吊り下げて乾かしもしたくらいや。

終戦直後は、物が無くて、間に合わせに荏油の代わりに鱈油[いわしあぶら]を使ってみたこともあったけど、あれは臭くて、乾きも悪くて往生させられた。今となっては、一つの思い出になってしまった。

思い出といえば、誰も、好きで戦争をするんやない。いろんなことが重なって仕方なく戦地へ行って、やっと帰って来てみれば、この物不足。”国敗れて山河あり” 何もないからこそ、こころの原点を見直すことのお機を持ってたのかも知れん。

和傘と違って、もう一方の提燈は、中にロウソクを立てて明かりに使うので、同じ荏油を塗るにしても、ムラにならないように気を使う仕事やった。字や絵にしても、和傘以上に形も色も変化があって、一層ムラにならないように気を張って顔料も吟味せならん。注文主の好みに合わせて、大きさと形をマチマチに作らならん。その上、原則として一回塗りやったもんで、塗り終わると和傘の2倍も3倍も疲れていた。手慣れることが難しかった分、仕事を仕上げた満足感は大きいもんやった。

金沢流の袖卯辰[そでうたつ]と先祖のことなど

老舗の多い尾張町の町並を見ていると、加賀のお殿様以来のシキタリを世襲しているのか、金沢らしい商家のたた住まいに気が付く。

かつての町並の屋根は、板葺き屋根に石を載せたものがほとんどの姿やった。上級武士とお金のある老舗商人だけが、艶のある瓦屋根にしているくらいだっ

た。それが、今ではほとんど瓦屋根に変わってしまい、その瓦が金沢らしい風情と言われるようになってしまっている。おかしいことや。

その屋根の上に檜[やぐら]のように乗っかっているのが“天窗”なんやけど。小さいところは、あのミニ天主閣の中が部屋になっていると思うて、遊び仲間の家を探検させてもろうたこともあった。そやけど、外から見るのと、内から見るのとは大違い。茶の間なんかの上の、吹き抜けの明かり取りの部屋みたいなものになっているもんで、床なんてあるはずもない。そやさかい、「あれっ、あの上の方の窓がそうなの」と、戸感ってしまう。さぞかし、掃除の時は大変やろうなあ、と人ごとながら心配してみたり。

と思ひながら、玄関から奥庭まで続いている“通り庭”と呼ばれる細い通路を走り回るのが何んともいえない面白さやった。北陸の雨や雪の多さで、日ごろ遊びに出る回数が少ないだけに、尚更。

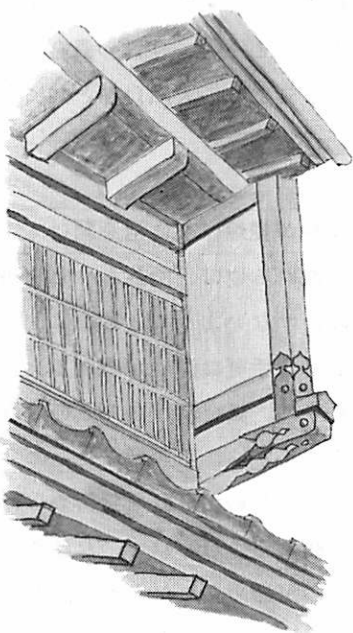
店先の玄関から中戸を越えて、茶の間・座敷の横を走って、李[すもも]や菜[ぐみ]、柿の木が端の方に植えられている中庭にまで行くと、一番奥のお勝手(台所)から誰かの怒る声が聞こえてみたり。きっと黙って盗りに来た、いたずら小僧やと思われたんやろ。

近ごろでは、この通り庭も、ほとんどがコンクリートになってしまったけど、昔は土に塩を撒いて踏み固めたもんやった。塩が、湿気を吸い込んでツヤツヤと光った土間となって、ひんやりと空気も澄んで気持ち良かった。

二階へ上がると、表通りに面した処が急に低くなって不思議やった。古老の話では、昔、お殿様が道を通る折、上から見られたらご威光に関わると言われ、見下げることの出来ん平屋建てしか許可してもらえなかった名残とか。それで、一見平屋建てに見え、ちょっこし明かり取りの窓が上に付いている風に作り、実は家の中に入ると二階建になっているように工夫したと聞かされ、ご先祖の知恵の深さに感心させられもした。

その、平屋もどきで、実は二階建の大屋根と一階の小屋根の両端に、魚のエラが張ったようになっているのが、この辺では“袖卯辰”といわれているものや。本来は、隣の家との仕切り板のためにあったもので、せいぜいが雨除け・

風除け・火除けだったものが、だんだん格好と格式のある見栄えに重点が流れ出すのは、世の常か。あげくの果ては、きちんと取り付けられない者には、甲斐性がない！と、決め付けられるようになってしまう。



ちょうど、「卯」という字に似た形をしているので、屋根の“両袖の卯辰”から“袖卯辰”といわれて来たのや。一人前になったら、この袖卯辰を取り付けないと、半人前にしか扱ってもらえない。「ウダツが上らない男」と、烙印を押されないうちにも、精一杯に見栄えを良くしようと拍車が掛かるわけ。

表日本で言われる、梁[はり]を受けている小屋の柱が、いつも上から押さえられているからとの話と違って、北陸らしい由来なんやね。

甲斐性のあるなしといえば、実家は、同じ姓になる木谷藤衛門の流れを汲むんや。銭屋五兵衛ばかりが加賀藩の豪商なんて目立っているけど、本物は一族の先祖やった木谷藤衛門やったと信じている。それが証拠に、銭屋五兵衛は加

賀藩のいざごぎに巻き込まれて没落してしまったがいね。

反対に、今でも木谷とか木屋とかいう姓字の付く親戚があちこちにたくさん残っておるさかい。理屈よりも確かな事実というもんや。この儂の体にも、あの日本海の荒波を乗り切った北前船の豪商の血が流れていることは、頼もしい誇りとして時折り思い起こされて来る。今でも、粟ヶ崎にある木谷公園は、その跡地とか。ご先祖があつてこそ、今日の儂らがあるのやし。

“生きて仕事している”ことは、天然自然と共に“生かされて仕事している”ことななかね。

お陰さままでのこころもちが提燈作りに道を開いて

決まった形でたくさん作れる物は、所詮もっと合理的なものが出来ると、その座を明け渡さなければいけないようや。和傘は、この北陸の気候にも合つて、情緒もあるといわれながら、手軽な洋傘が現れると、たちまちの内に見向きもされんようになってしもうた。紙合羽屋さんとの陣取りどころではない。

傘が売れんようになるころから、不思議なことに今度は提燈の引き合いが多くなって来たので、一息付けたのが正直な気持やった。確かに、これまで傘と違って手間暇が掛かると面倒くさがられていたけれども、職人らしい仕事やと手を抜かんと作っていたのが認められたんやろ。ありがたいことや。

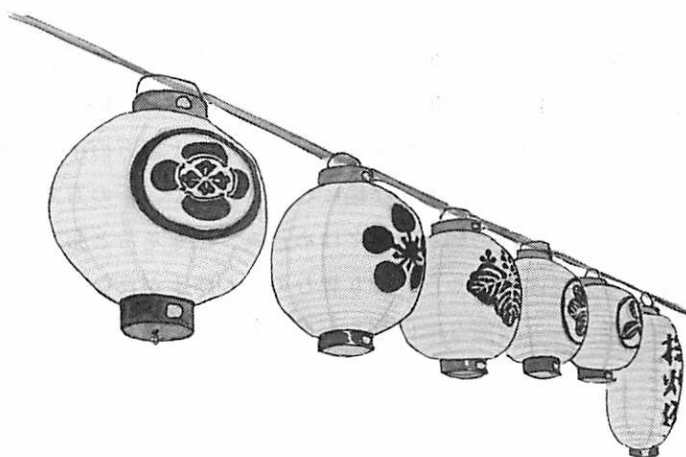
そんな提燈も、どうゆうわけか、金沢では“御神燈”と書く物を良く作られるんや。

一方、お祭りの多い能登の方からの注文は“家紋”が多いし。地域性が大きく現れているのは面白いことや。

何気無く仕事をしながら、仕上げの字や絵を書く段になると、それぞれの地域での、神仏やご先祖様を奉る思いが伝わって来るようで、敬虔な気持ちにさせられる。秋祭りなんかには使うはずなんやろうね、日限が近づくと忙しくなるんやけど、妙に心が静かで感謝の念が焼き付いて離れない。

大昔、お祭りというんは、人知を超えた天地万物に向かって大地の恵みを祈願し、感謝していたんやろね。それが、近ごろのお祭りでは形だけが残ってし

もうて、何のためのお祭りか忘れかかっていることが残念や。何んでそうなのか、ということの理が、一番大切なことなのに。



それでも、こころを込めて一所懸命に提燈を作っていれば、誰かが儂の気持を汲んでくれるかも知れん。少なくとも、天は知ってくれてるはずや。

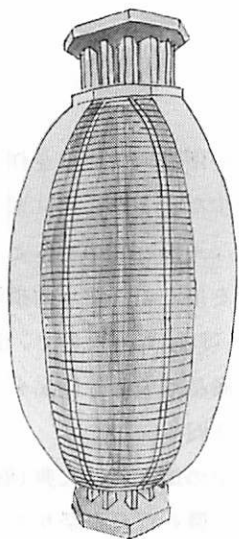
尾張町の筆屋のご隠居さんなんかと話をすると、こんな気持が尚更に確信される。眉毛や鼻の細かい部分を描くのに使う面相筆[めんそうふで]を、提燈の仕上げに使うのに重宝[ちょうほう]だったので、良く買いに行ったたんやけど、商人も職人もこころを込めた商品や製品や作品を、使ってくれる人の喜ぶ姿を励みとしてお世話することでは同じなんや。

先代の親父さんが、昭和天皇の即位のご大典(昭和3年)を記念して、5尺の大きな提燈をつくったという。儂も百万石祭りで、金沢駅に6尺の提燈を丹精込めて作り、多くの人と喜びを分かち合えたのは、いい思い出になっとる。

“加賀”提燈の火を灯しつ

普通にいわれる提燈というもんは、竹の骨が螺旋状になっていて、いうてみれば蛇がとぐるを巻くようになってるんや。これやと、1ヶ所が切れるとバラバラになってしもうて使い物にならんようになるけど、作り易いんや。町中に見掛けるものは、ほとんどがこの岐阜提燈の格好しとるわいね。

けど“加賀”提燈と、頭に加賀の字が付くこの提燈は、ちょっとばかし違うんや。儂らが代々受け継いで仕事して来たものは、竹の骨の輪が一本ずつ別々になっているところに、他と違う妙味を持っている。上の方の小さな輪から、真ん中になるにつれてだんだん大きな輪になって行って、下の方ではまた小さな輪になって行く。この竹の輪を木型にはめ込み、紙をそっと張って行く。手間が掛かっている分だけ丈夫やし、折り畳むのにも勝手が良いし。この辺のコツはもう、体で覚えんと綺麗な形にならんやわ。



ちょうど、ほらギリシャのエンタシスとかいう柱。尾張町の町民文化館にもあるけど、あれは女の人の足を現しているんやて。先が細くて、真ん中でややふっくらとして、付け根でまた少し引き締まって.....。そう考えると、提燈も色っぽいもんや。美しいものは、物言わんでも、どこかしら人の気をそそるものなんやろね。

そやさかい、尚更に心意気を一本、ピシッ！と通しておかんと、まとまりのない、だらしない感じの提燈になってしまう。というて、ガチガチになってしまうたんでは、今度は野暮になってしまう。やっぱし、お殿様の石垣下に生まれた粋な気持を忘れんようにすることが肝心なんかね。



いろんな理屈はさておいて、一所懸命に集中して仕事をした後、キチンと仕上がった提燈を見ると、自分の娘のように可愛いくていとおしいもんや。そん

じょそらのものと比べるなんてとんでもない。竹の骨の形といい、紙の艶といい、惚れ惚れする。

近ごろでは、もっと上手に字だけでなく、絵が描ければずっと良くなると思うて、人様の書きたいいろんな絵を勉強させてもろうと。本当は、見えない処の骨組みや紙張りこそが大事なんやけど、どうしても見える処の字や絵の書き入れて出来が左右されるんや。ところが、提燈用という決まった字や絵がないだけに手本もなく、尚更に厄介というか。

勿論、人の世に当てはめてもそうやけど、表面[おもてづら]ばかり良くて中身の無いのは、何か薄っぺらな感じがするし。中身は良いけど、表面の構わないのはだらし無い感じがする。要は、この良い処の兼合いというんか、宝石だって磨かれなければ光ってこないんだし。

提燈屋の儂がこんなことをいうと、意地悪な人なんかトトナワン(とんでもない)理屈で、俗語では中身の無いことを提燈のようだとか、人様にへつらってばかりいることを提燈持ちとか、伸び縮むことを隠語で性器を指したりとか、いろんなことを言うてくる。それこそ、その人の浅はかさを現しているようなもんや。

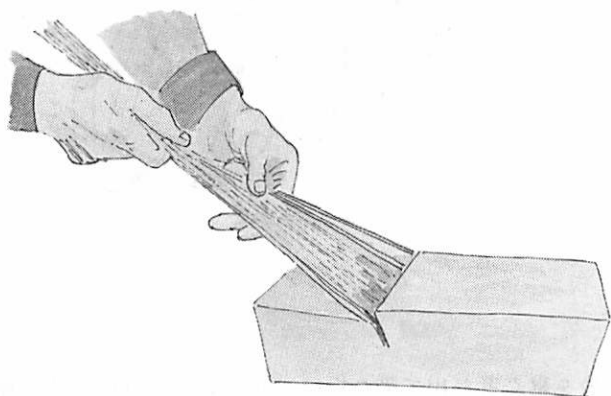
自分こそが肝要なんや。性根を据えて仕事する。この道は、何か一つに満足すると、すぐにその先が見えて来てしもうて、これで終いということにならんのやね。いつまでも辿り着かんから、却っていつも新鮮な気持でおれるさかい、ちっとも年を取ったような気にならんし。若さを保つ秘訣なのかもしれん。

尾張町の商売屋さんを見回しても、決してこれで満足なんて思わんで、いつも前向きに工夫しとるさかい繁盛してるんやろね。職人も商人も、根は同じなんやわ。

新しい世代の中での伝統技能の発展を願いつつ

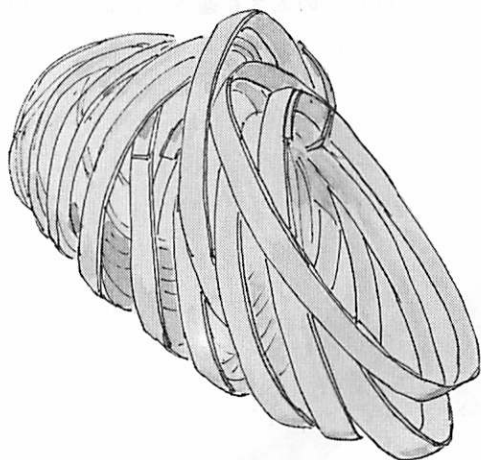
職人仕事に“こだわり”は付きもの。和紙にしても、飛騨高山の八尾のものが儂の仕事には一番合うていた。それも、寒の水で漉いたものでないといかん。変な臭いもなく、締まりも良いし。

竹ヒゴも、佐渡のものでないと具合が悪い。京都のものや、最近のプラスチックもどきのものでは、一時の見映えはするけれど、すぐ駄目になってしまう。提燈の大きさに応じて、竹ヒゴの太さも違うし、シナリ具合もそれに応じたものでなければいかん。



そこまで“こだわり”を持って仕事をしていても、この儂の技術を受け継ぐ者がおらん。若い者は、こんな手間暇の掛かるだけで、華やかでない仕事には段々寄り付かなくなって来ていることは残念なことや。ちょっと見映えが良いと、すぐ飛んで行ってしまふ。

本当の職人仕事は、辛抱と長い時間を掛けてこそ、分かる人に時代を越えて理解され、陽の目を見るもんや。ちょうど、古い建物の柱が、その木の樹齢が300年なら300年持つのと同じように、手間暇を掛けただけのことがあるものやさかい時間を越えて残るはず。

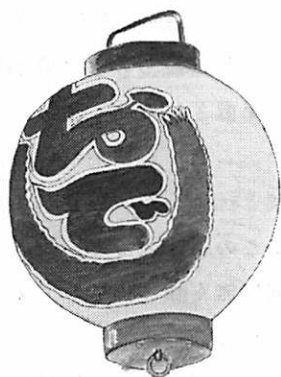


ところが、後を継ぐ者が出て来た折に、せめて良い材料だけは揃えて置いてやろうとしていると、今度は、その仕入れ先も職人不足で苦労しているみたい。高山の紙漉き職人も、佐渡で竹を細工する職人も、だんだん先細りにいなくなっているとか。その上に、天然の材料までもが不足勝ちとも聞く。

目の前には直接は見えんけど、何か失ってはならない大切なものがどんどん消え去って行くようなころごろ。平成天皇が即位の大典(平成2年11月12日)をされてから一年余りたって、平成4年春に店を改装する折、時流に乗って単に体裁良くするのだけは嫌やった。せめて、これまでの儂の職人としての“こころ粹”を見てもらおうとして、あえて昔からのもの、仕事道具を並べてみた。こころある人が、いつか訪れてくれ、その底に脈々と流れるものを感じ取って来れるのを待ちながら。

伝統技能の絶えることはなく、人が人としてある限り、必ず続いて行くこと

を信じて疑わずに。



五十嵐英治・翁について

大正十年九月十九日生。加賀提燈を作り続けることを生業[なりわい]とし、石川県伝統産業優秀技術者賞を受ける。職人根性の気風が、限りなく地域を愛し、尾張町の街の商いを、ここから灯し続けている。

あとがき

「考え取る」ということは、この現代社会の中で、素早く・的確に情報を得ることにかけては、より適切な行動様式でしょう。冷静な判断で、物事を分析し、予測する。この優等性のようなあり方を、私達は長く信じ過ぎていたのかも知れません。

ここで気を付けなくていけないのは、物理的なことを得る代わりに、何か人として大事なものを、知らず知らずの内に切り捨てていたのではないのでしょうか。

人だけが特別なのでなく、この大いなる自然の中では、人も含めた生物全体が等しいもの。さらに、もう一歩進めて、生きていないように見える自然の物も含めて.....

すれば、「感じ取る」ことこそが、万物に与えられたものといえないでしょうか。長年に渡る体験と直感を養うことによって得られる知恵と技術の賜物の価値が見直される訳です。

幸い、こうした事柄は、職人仕事や、飽きずに商いする人たちの中に、今でも連綿と伝えられ、残されています。

その店に入ると、職人としての、あるいは商人としての立ち居振舞いの中に何気無く醸し出されて来るようなもの。もっと分かり易くいえば、独特の薫りとか.....

「～らしさ」とは、目に見える姿や形でなく、目には直接見えなくても、何かしら漂うような気配とか雰囲気とかいったものでしょうか。それも、だらしがないのではなく、どこかしらキチンッと整理されたというか。

提燈屋さんには提燈屋さんとしての糊の薫りもすることでしょう。でも、大切なのは“見えない”何かを、“見える”糊の薫りを、特別のものにしていることです。

そんな、私達が忘れかかっているものを、「感じ」出させてくれたのが、今回の職人さんの話のようでした。これからも、尾張町と共に頑張って下さい。

《《 さし絵の説明 》》

項	目	内 容
○	表紙	「御神燈と書かれた加賀提燈」
	<目次>	
○	いきなり職人にさせられて	「加賀提燈用の丸形の木型」
○	〃	「木地の金具の取付道具」
○	店先の仕事場から町並の風情を感じ	「糊[のり]桶とハケ」
○	〃	「桜と菊と牡丹[ぼたん]をあしらった加賀提燈」
○	子供ごころに残る尾張町界限のこと	「竹ぼっぱ」
○	芝居小屋と浅野川慕情	「かき舟」
○	失った親父さんの背中から出発して	「加賀提燈に掛けて結びつける綿糸」
○	傘を“乾かす”苦勞と紙合羽屋さん	「和傘」
○	金沢流の袖卯辰と先祖のことなど	「袖卯辰[そでうたつ]」
○	お陰さままでのころもちが提燈作りに道を開いて	「家紋入りの加賀提燈を並べて吊る」
○	“加賀”提燈の火を灯しつつ	「ナツメの型に紙を貼る」
○	〃	「御神燈と書かれた加賀提燈」
○	新しい世代の中での伝統芸能の発展を願いつつ	「竹ヒゴの寸法を揃える道具」
○	〃	「加賀提燈の上下の中輪」

《《 さし絵の説明・続 》》

項	目	内 容
○新しい世代の中での伝統芸能の発展を願いつつ		「居酒屋と書かれた加賀提燈」 「御休み処と書かれた加賀提燈」 「おでんと書かれた加賀提燈」
○裏表紙		「御神燈と書かれた加賀提燈」



発 行 = 1993年9月吉日

著 者 = 石野 瑠一

さし絵 = 村上 隆

発行所 = 金沢市尾張町1丁目11番8号

尾張町商店街振興組合

尾張町若手会